

寺子屋における歴史教育の研究

吉 田 太 郎

A Study on Education of History at Terakoya Schools

Taro YOSHIDA*

S U M M A R Y

During the period of about 260 years of the Edo Dynasty 1610~1868, there had developed throughout the country a total of over 15,500 Terakoya schools or private educational institutions for the public.

The purpose of Terakoya schools was to give the mass of the people fundamental knowledge necessary for their daily lives as well as to teach them writing and reading. This was just what had happened with Writing schools or Reading schools found in the seventeenth-century Europe.

At Terakoya schools in Japan the students were free to enter and to leave when they liked. The graduation from the same involved no social privileges of any kind on the part of the students. Most of such institutions were of one-room and one-teacher, with completely meagre educational content. One should not, however, overlook the fact that the prevalence of Terakoya schools in Japan had contributed towards a very small number of the illiterates, as compared with those of the world at large in its contemporary period.

Some of the textbooks or readers used at Terakoya schools consisted of articles, dealing with works of great men in history or with main historical events of Japan.

The present writer intended to analyze the content of such textbooks or readers, and to look into the educational influences such textbooks or readers had left upon the people. He regrets to say, however, that on account of the extreme shortage of relevant materials he has not been able to make researches into the actual curriculum building, and methods of examination as well as of evaluation of the results.

In conclusion, it must be emphasized that the role of Terakoya schools was so important and their educational achievement was of such great magnanimity that in 1872, when western educational system was first introduced to Japan and the elementary school was made compulsory, the ratio of enrolment was extremely high, proving that Terakoya schools had cultured the enthusiasm of the people for the necessity of education.

目 次

序 研究の目的	2 寺子屋教育の内容
I 寺子屋の教育史上の価値	3 寺子屋開設の動機
II 寺子屋の発達の概況	4 寺子屋と藩校の設置の比較
1 寺子屋の意義	5 寺子屋経営者の身分の考察

* 社会科教育教室 (Dept. of Social Studies)

- | | |
|------------------|------------------|
| Ⅲ 寺子屋の教科目と歴史科の位置 | (3) 歴史の語彙を主としたもの |
| Ⅳ 歴史的教科書の分析 | (4) 歴史千字文型のもの |
| 1 寺子屋用教科書の種類 | (5) 法制的なもの |
| (1) 往来物の意義 | (6) 通史的なもの |
| (2) 往来物の種類 | 3 歴史教科書使用の概観 |
| 2 歴史教科書の分析 | V 歴史教授の方法 |
| (1) 歴史地誌的なもの | VI 歴史試験の方法 |
| (2) 歴史人物を中心としたもの | |

序 研究の目的

江戸時代教育機関には、主として支配階級である武士の子弟を収容した幕府立の昌平校が江戸にあり、地方には藩主立の藩校が278校あった。この外に寺子屋がある。この寺子屋は、庶民の子弟のための生活に直接に役立つ教養と技芸を授けた私立の庶民教育施設で全国に約15,512校あった。

筆者は年来江戸時代の教育機関での歴史教育がどのように行なわれたかの研究に志し、昌平校と（横浜国立大学研究紀要、No. 4. 1964年）藩校（同紀要、No. 2. 1962年）の二小論を発表した。

この一連の研究として寺子屋における歴史教育をとりまとめたのがこの小論である。

今まで昌平校・藩校・寺子屋の歴史教育の研究には、部分的に触れたものは若干あるがまとまったものは未だに見聞をしていない。

原拠資料にしたのは、文部省編「日本教育史資料」（第8、9巻、明治25年版）と、乙竹岩造著「日本庶民教育史」（3巻、昭和4年刊）と、地方自治体の教育史である。この外に石川 謙博士の多くの著述を参考にした学恩に御礼を申し上げるのである。

この資料の中で皆無に等しいのは、試験の方法とその評価の記録のないことである。今後の採訪によってこの欠除を埋めて内容の充実を期するものである。

なお江戸時代教育機関の中、郷学と私塾における歴史教育の研究を試みているので、これがまとめり次第一連の研究の一部として世に問う予定でいる。

I 寺子屋の教育史上の価値

江戸時代の教育で庶民を対象にすばらしい教育実績をあげたのは寺子屋である。

寺子屋は、江戸時代の庶民が自分たちの生活の欲求から産み出した立派な教育施設であって幕府とか藩主の助成などでできたものではない。

もとより教育の施設・内容・方法においては、昌平校なり藩校と比べれば、1教室1教師の粗末な雑然たるものであった。しかし生活にすぐ役に立つ独特の教科書すなわち往来物の手習と読書を身につけ、庶民として生きぬくための歴史・地理・公民的教養を抽象的

な理論でなくて、生活の知恵を学んだことに価値があり、これが全国津々浦々に普及したことも特筆すべき教育熱といわねばならぬ。

比較教育学の立場から調べると、17世紀には欧米諸国では習字学校 (Writing-school) とか読書学校 (Reading-school) が存在していた。この外にイギリスの庶民学校には、おばあさん学校 (Dame-school)、日曜学校 (Sunday-school)、ぼろ学校 (Rugged-school)、慈善学校 (Charity-school) があったが、普及率はわが国の寺子屋の比ではない。

寺子屋は教育内容は幼稚であったにしても、明治維新前の庶民の読書算の教育水準の高かったことは世界ではまれであると思う。

明治維新の混乱で寺子屋は一時的には閉鎖状態になったが、明治5年(1872)の学制発布によって教育機関は官立・私学・家塾とに整備された。

この学制によって寺子屋が公立の小学校に引上げられたものはなほ少ないが、変則小学校とか私立小学校となったものは多い。また寺子屋が家塾として残り、教師の免許状はもたないが自宅で教育したものが多かった。

明治維新後の日本の急速な発達、常に世界の新興国の驚異の的である。その淵源は義務教育の全国的な普及にあるといわれている。明治9年には約2万7千の小学校(義務年限は4年)が開校され、明治40年には、全国民の男子96% 女子92% 平均94%の初等教育機関の就学率となったことは世界でもまれであるといわれている。

この義務教育の普及は、藩校278校と寺子屋15,512校の武士と庶民の全国に及んだ教育的エネルギーの積み重ねによるものである。

現在の日本の教育水準の高いことは、単に明治以後の先駆者だけの功績ではないことを忘れてはならぬのである。

とりわけ寺子屋の庶民の教育に対する貢献度は大きく、江戸末期には文盲は非常に少なくなっていたことが大きいと思う。

II 寺子屋発達の概況

1 寺子屋の意義

寺子が集って学習する家の意味であり、文字の示すごとく中世には僧侶が教師であり生徒を寺子と言い、入学を寺入といい、学舎を寺、または寺屋といったという。

ここでいう寺子屋とは、江戸時代享保前後(1716前後)からをいうのである。

寺子屋は、庶民の子弟が日常生活に必要な初歩的実用的な知識・技能を教える私立の教育施設である。庶民に限ったのは「農賈ノ子ドモハ、世ニイフ寺子屋ヘ遣ハスコト勿論ナリ。士族ノ子ハ然ルベカラズ」(江村北海、授業篇)で明らかである。

この庶民の子弟が6~13才までの間に何の準備もなく入学した。(入学年令の全国平均は男子は8,9才、女子は9,8才である)在学年限は1年から9年までであった。

親がわが子女の幸福を願う一念から支配階級から奨励も強制も受けず入学させた。別に入学証書もなければ卒業証書もなくいつ入学してもいつ退学しても自由であった。卒業し

たからといって何の社会的な特権も資格もなかった。また親も子女も特別に地位などは考えてもいない純粋な教育的情熱の発露であった。

2 寺子屋教育の内容

授業は、おおむね年中行なわれているが地域差とか年中行事・農作業などによって違いがある。休日は毎月 2 回 (1. 15 日とか 5. 10 日)、この他に節供、氏神・氏寺などの祭礼、農繁期などと盆と正月に 10 日間位の休みがある。始業時刻は全国平均午前 8 時 (53.1%) か 9 時 (19.1%) 終業時刻は午後 4 時 (38.08%) か 3 時 (25.42%) である。

学校行事は、書初・席書・天神講・七夕祭りなどがある。この諸行事は、寺子の楽しい祭りでもあり、日頃の成績の展示会でもあり、単調な生活の区切りでもあった。これらの行事では主として習字の優劣を競ったのである。なお僕の教育は厳しいものであったことも忘れてはならない。

具体例、赤津沓水教育記録による。

授業は午前 7 時頃に始まり午後 2 時半頃に終る。朝寺子が教場に入るとまず師匠に挨拶をして自席に坐して待っていると、師匠が 3 尺位の鞭を手にしながらか教場に入る。7 時から 10 時半頃まで手習、10 分位休み正午まで読書、食後約 1 時間休み、午後 1 時半から 2 時半頃まで手習をする。読書は素読だけで意義を教えなかった。(日本教育史資料巻 12 学士小伝)

この例のごとく寺子屋は、手習修業が本体であったので、藩校で武士の子弟は寺子屋で見られない漢文体の教科書の読解を主とした。その下請機関として手習を寺子屋に依頼したものが可成り多かった。

3 寺子屋開設の動機

寺子屋開設の動機を要約するとつぎの 6 項に要約できると思う。(愛媛県教育史前篇 439 頁参照)

(1) 藩主の奨励によるもの——寺子屋は庶民の自発的私立教育施設であったが、若干の藩主は寺子屋の開設を支援したのもあった。これは純粋には庶民の教育向上のためと、藩校へ入学する武士の子弟の予備門としての意味とがあった。

(2) 師匠の教育愛の発露によるもの——武士・僧侶・医師・神官などは恒産をもち地域社会で尊敬をうけている知識人であり、余暇を慈恵的社会教育として金銭を度外視して奉仕する人が多かった。

(3) 父兄が子弟の教育の必要上、師匠を招請して開設したもの——師匠の人柄と学識を認めて住宅を提供し、応分の謝儀を支払って生活を保証する教師稼業を承認したもので、都市に多かった。

(4) 師匠が生業として自ら開設したもの——幕末になると武士が薄給のため生活しにくくなったものが多くなったためである。

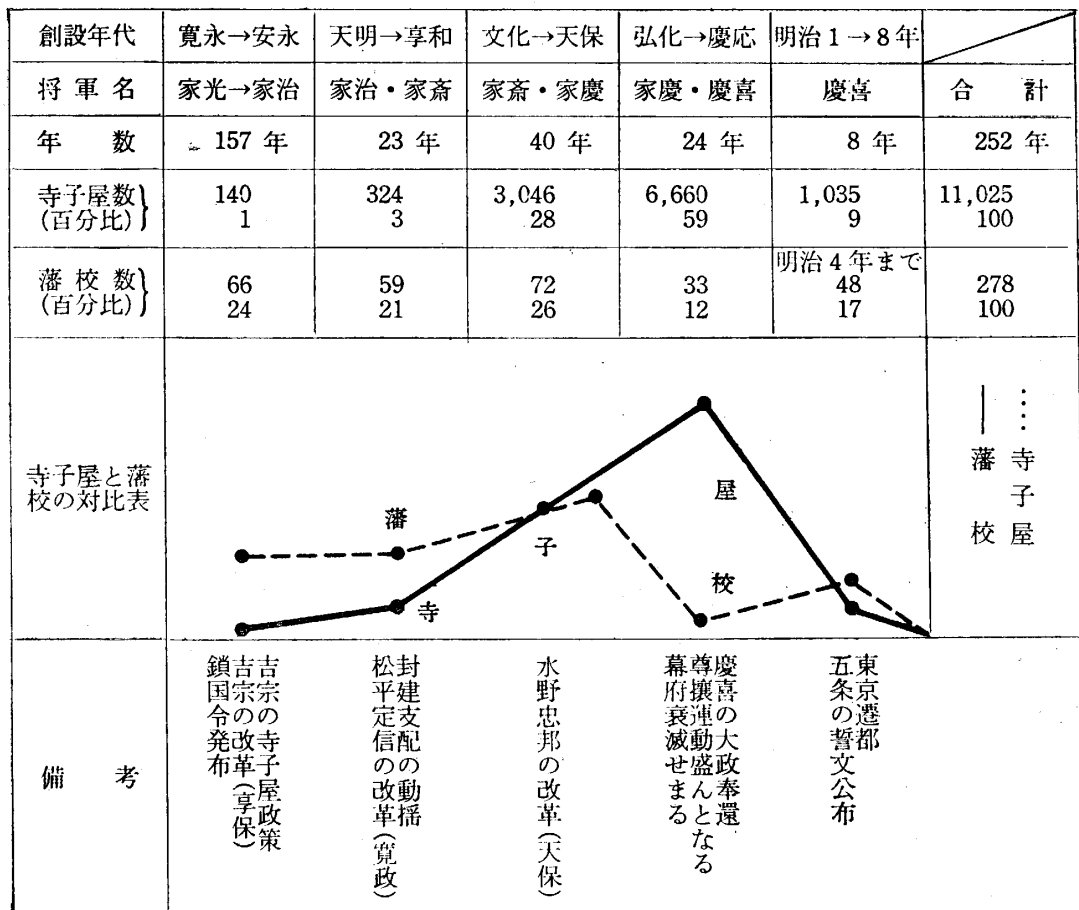
(5) 神官・僧侶が布教の一助として開設したもの——(2)の純然たる社会奉仕の外に、同職の身でありながら氏子・檀下の信頼をうるために寺・社の一隅を教室に提供し、自ら師匠となったものもある。

上述の理由により開かれた寺子屋であるだけに、師弟の間柄も上下・古新の区別は厳しかったものの庶民的親愛の情が濃やかで、郷学・私塾では学校化しているので教師の先生、生徒を塾生とか見習生、古参の生徒を句読生と堅苦しく呼んだのに比べて、寺子屋では師匠をお師匠様、旦那様、生徒を寺子、弟子児、古参者を兄弟子、代稽古と呼んでいた。

師弟の間柄は親しさの中に権威を保ち、学業のみでなく人間的な情愛を終生もちつづけて、師弟の美談は至るところにあった。その証拠に筆子塚という記念碑がある。師匠の姓名を表に大書し、裏には師匠の伝記と門弟一同の名を彫りつけた碑が門弟の喜捨によって建ち、今でも地方に残存しているほどである。

4 寺子屋と藩校の設置の比較

寺子屋と藩校は、江戸時代の教育機関の双壁であるが、師匠の教養、生徒の身分、校舎の設備、教科の内容において著しい差違があることは設立の趣旨から十分に推測しうる。両者の設置の対比表によって普及の速度が明らかに認められる。



注 1. 寺子屋の集計は、日本教育史資料による。しかし埼玉、茨城、岩手、奈良、香川、愛媛、沖縄の7県の資料は皆無である。

2. 寺子屋数は、日本教育史資料によると 15,512 校であるが、開設年次が不明なものと寛永以前開設のものは省略した。

15 世紀から 16 世紀にかけて武士が治者階級であり絶大な政治権力を握り、徳川政権が天下統一の宿望を果して全国に威望がおよんできた。17 世紀後半 3 代將軍家光のころになると、士・農・工・商の最下層階級の町人（工・商）階級が経済的実力を蓄え社会的勢力も強大になり、文化的教養も高まってきた。

日本歴史始って以来下積みの町人階層が、実質的に治者階級の実力としての地位を獲得し、武士が実力的には被治者階級に移行し始め、幕末になるに随って数度の改革を行なって幕藩の治者としての権力の回復を行なっても失敗するばかりとなったのは、すでに時の勢に勝てぬことを示した証拠である。

この実勢力の転換が藩校と寺子屋の設置の対比表によく現われてきている。

寺子屋の増設時期をつぎの 3 期に区分して若干の説明を加えてみる。

第 1 期 天明から享和まで（1781～1803）の約 23 年間に 324 校の開設をのみたのに、藩校は 59 校にすぎない。藩校と寺子屋とで教育設備・教師の俸給などの費用は寺子屋の設置の比ではないにしても寺子屋の増設は盛んである。また寺子屋にしても寛永—安永の 157 年間に 140 校の開設したのに比べて、約 1/5 の短い年数に約 2.5 倍の増加をみるに至った。

この時期に老中松平定信が寛政の改革（¹⁷⁸³天明3～¹⁷⁹³寛政5）を行ない、諸事緊急政策を行なって幕威の回復を図ったが町人階級の実力の向上に勝てずあえなく失敗に終わった。この庶民の実力の増加を背景にして教育熱は上昇した現われがこの第 1 期である。

第 2 期 文化から天保まで（1804～1843）の約 40 年間に 3,046 校の急増となり藩校は 72 校が増加した。

この時期に老中水野忠邦（¹⁸⁴¹天保12～¹⁸⁴⁵弘化2）が天保の改革を行なったが、完全に失敗に終わった。内憂としては農民の不平等が一揆の頻発となり、町人は大名の経済力を握り、外患としては、中国が西洋列強による半植民地化し鎖国的政策は維持できなくなってきたのである。

治者の実力の衰退は庶民の自力による成長を図らねばならぬから、けわしい世の中に強く生きるために寺子屋入りが庶民の常識化してきたので寺子屋の急増を招いた。

第 3 期 弘化から慶応まで（1844～1867）の約 24 年間に実に 6,660 校におよぶ爆発的増設をみた。寺子屋総数の約 6 割がこの期に開設したのは誠に驚異的である。藩校はわずかに 33 校の増加にすぎぬ。

このころ徳川將軍の継嗣争いが起こり統制力は地におちた。加うるに欧米列強のわが国に対する開国の要求は激しく、圧倒的な軍事力と経済力を背景として幕府にせまりその対策すら施しえなかった。西南雄藩は倒幕を考え藩校の出身者である武士層まで支配力解体の主勢力となって表面に躍り出た。

最早武士の支配力は崩壊してきたので庶民が今後いかに生きぬくかの瀬戸際に立たされるに至った。この生活力の養成の根底がひいては寺子屋の爆発的増加を招いたものである。

明治 8 年までになお 1,035 校の増設をみたのは、この第 3 期の余勢であり、遂に総計約 11,025 校の開設となった。かくて全国に寺子屋が普及し男子は寺子屋へ行かぬものが少なく、女子は大半は寺子にならなかったが、文盲では生活に困るので寺子にならずして自

力で生活する間に読書力を会得したのである。

寺子屋の内容は、1人1教室から数人の師匠と数十百人の寺子がいる程度の多種多様の初歩的な手習に始まって、低度の読書力を身につけるものであったが、明治5年の学制改革によって小学校設置をあの維新の多難なときに断行されても驚かず入学者が非常に多かったことは、長年に積み重ねられた寺子屋の教育上の遺産の継承であり、その功績は絶大なものといえよう。

明治開国により先進国の異質文化を積極的に吸収し普及した進歩的な国民の態度を示したのも、遠くから広く養った賜物といえる。

5 寺子屋経営者の身分の考察

寺子屋の経営者は、師匠でもあった。中には規模の拡大に伴って代稽古を雇い入れたものも発生してきた。身分階層の考察の目的は、師匠の身分によって教養の差を推測し、読書に用いる歴史向教科書をどの方向に利用したかを知りたいためである。

年号 身分	文明→元和	寛永→延宝	天和→正徳	享保→天明	寛政→天保	弘化→明治	合 計	百分比
平 民	3	10	13	72	1,137	2,939	4,174	39.86
武 士	2	3	3	44	835	1,810	2,697	25.74
僧 侶	1	11	2	22	479	1,371	1,886	18.00
神 官	4	5	10	28	228	515	790	7.54
医 師	1	0	2	33	294	597	927	8.86
合 計	11	29	30	199	2,973	7,232	10,747	100.00

注 1. 石川謙著 寺子屋 122 頁より引用。2. 経営者が師匠と考えてよいと思う。3. 女子の師匠も若干ある。4. 身分不明のものもある。

師匠は全期を通じて第1位であるのは平民出身である。町人の子弟が要求している日常生活に困らない読・書・算の初歩を教える師匠は、平民の中の知識人が最も適していることはいままでもない。武士の教養は読書において中国流の儒者の素養であり、実生活とは遊離して治者向きのものであり、算はいやしいことと軽蔑していたのが常識であった。

17 世紀の後半になると農業生産は著しく増加し農産物の取引を促がし、流通経済を専業とする商業が起り商人仲間が多くなり、都市中心に町人階級が形成されてきた。町人は武士のいやしとする金儲けのあけくれである。身分社会では最下位にある町人層が富を貯え文化的教養も豊かにもち始めてきた。とはいってもまだ町人とか農民出身の師匠が早くから多数生じたわけではない。町村の有力者すなわち下級の下役の者が文字の読書に役目上優れていたなのでこの仕事の余業として師匠役を勤めていたのが多かった。

実生活に文字の教養が益々必要になってきた 18 世紀の後半からは、読書教育を親が要望し師匠への謝金を支払っても子弟の教育のために積極的に寺子屋入りを勧めるようになってきた。

庶民の中の知識人として余暇をもつ人に高度な学者向の教養を身につけている例は少な

かったが、庶民の日常生活に必要な読書位は教える人も幕末に近づくほど多くなってきた。庶民の出身でありながら藩校によっては武士の子弟の外に少数の藩校入りを許していた藩主も可成り多くなってきたので、ここで正当な修行を何年か卒えた後師匠となった人もある。

平民出身の師匠の多かったことは、教養の国民的向上として喜ぶべきことであり、初歩的な読書を手軽に教える安易さも大いにあったと思われる。

第2位は武士層である。この武士層は、上位の武士層ではなくて薄祿に苦しむ下層の武士か浪人が師匠になったのである。武士は治者として藩校に入学することができ、庶民よりも高い教養をうけていた上に余暇も多かったから、「手跡算術の指南、また、少々の素読を教えて是を以て口を糊する」。(中井竹山、草茅危言巻四) ことにもなり適当な家庭塾であった。

第2位の僧侶と第4位の神官は、職業柄文化的教養も高く固定した収入もあり生活も安定し住民の尊敬も高かったのである。

寺子からの謝礼を当てにせず社会奉仕的に広い建物の一部を教室に提供して信者からも喜ばれていたのである。師匠は若い下級の僧侶・神官が多かったことは、武士の場合と同じである。

第3位の医師は医術をもって生業としていたので生活費のために寺子屋を開く必要はなかった。医師になるために漢方医であるため長年相当の漢籍の医書を読む修行を積みねばならなかった。医業は仁術的気風もあったので社会奉仕的態度も強く、医業の余暇に余技として寺子に教える学力は十分である。

師匠の学歴を知る資料はほとんど見当たらないが、相当の学力差はあったのは当然である。歴史向の教科書を教える学力をもつためには、藩学・私塾・郷学に学んだ者か、この門弟になったものでなければ自信がもてないと思う。

幕末になると尊攘運動が盛んとなりこの時局のために、日本歴史の知識と日本人としての時局に対する態度を養うために、歴史本の読書が寺子屋で行なわれることが多くなったことは当然であろう。

Ⅲ 寺子屋の教科目と歴史科の位置

教科目別の全国集計はつぎの表で明らかである。歴史科のあるのは、20校でわずかに総数の0.065%にすぎない。

寺子屋の生徒を手習子とか筆子と呼んだことでも明らかなように、習字を学ばない寺子屋は皆無であり、これが郷学や私塾にみられない特色である。つぎに重視したのが読書であり、それについて珠算であった。

庶民の日常生活に欠かせないのは、実用的な文字教育としての書くことと読むことであり、簡易な計算のための珠算が必要であった。珠算も加減乗除である。したがって読・書・算の実用必須科目は、教科目69種中の約84.2%に達しているのは当然であり、欧州の

順位	教科目の種類	実数	百分比
1	習字・読書	1,254	40.88
2	習字・読書・算術	1,120	36.54
3	習字	207	6.75
14	習字・読書・歴史	12	0.39
22	習字・読書・算術・歴史	4	0.13
	習字・読書・地理・歴史	1	0.03
	習字・読書・算術・地理・歴史	1	0.03
	読書・漢文・歴史	1	0.03
	習字・読書・歴史・法律	1	0.03

- 注 1. 乙竹岩造・日本庶民教育史下 958～960 頁から抽出。
 2. 科目の明記してある寺子屋の総計は 3,065 校である。
 3. 歴史科のあるのは総計 20 校である。

近世学校も庶民教育目的のために読・書・算の学校が多かったことと同様である。

注) 大阪は天下の商業の中心で町人の勢力は絶大である。その大阪商人の子弟には寺子屋のことを算盤屋と称し、珠算教授で加減乗除と金銀銭の換算から開平・開立に及んだ。

教科目は時代の進歩に伴って分科するのは当然である。寺子屋の教科目の中で初歩的な歴史的な教養は、寺子屋独自の教科書である往来物の中に含まれていた。その著しい例は源義経、熊谷直実、曾我兄弟の書状や物語の往来物である。この種の往来物を読書用の教科書として使用した。

江戸時代末期になると、独立した歴史科がおかれたのが僅かに 20 校にすぎなかった。この独立教科の歴史科の教科書は、最早や往来物風の素朴断片的な感情をひき起す教材では満足できず、通史としての日本史やまれには中国史が素読用の教科書として登場してきた。

これを教える師匠は相当な漢学の教養を必要とすることは当然であり、武士、神官、僧侶の知識階級層に多いことはいうまでもない。

IV 歴史的教科書の分析

1 寺子屋用教科書の種類

(1) 往来物の意義 寺子屋専用の教科書を往来物という。「往来」とは、消息（安否）の音信（たより）を意味し、往来物といえは、書状往復の文案を集めた書物をいうのである。

往来物の特質は、(イ)初歩的な性質をもつこと、(ロ)実用的な特色を有すること、(ハ)習字用の手本として書写または刊行されていることの三点である。この往来物を手習の手本としながら読むことに併用した。詳しくは書いては読み、読んで書いてのが往来物の学習方法である。

(2) 往来物の種類 往来物の先駆は、すでに平安時代の後期(11世紀の中期)に出現

し、進状に対して返状というような往復一対の手紙を収めた初歩者向の教科書であって往来の名称をもち、その古くて代表的なものが平安後期の明衡往来^{めいこう}「東山往来」^{とうざん}などがある。

江戸時代の往来物になると、教材の範囲も広く教育目的によって細分されたのは庶民生活の分野の広域面におよんできたことによる。加うるに印刷技術も進歩し書物の刊行も盛んとなり、民間の購買力も教育熱の向上とともに益々拍車を加えてきた。

このために寺子屋の増設に伴って近世における往来物の新作も 1,993 種に及んだ。

つぎの表は新作往来物の科目別発行一覧表である。

科目別 年 次	教訓科	社会科	語彙科	消息科	地理科	歴史科	産業科	理数科	合 計
慶長一万治	25	9	10	12	6	8	0	13	83
寛文一宝永	31	21	37	44	13	16	3	13	178
正徳一寛延	28	8	31	37	15	10	6	13	148
宝暦一安永	17	12	24	62	21	7	13	16	172
天明一享和	25	18	16	42	45	2	28	19	196
文化一天保	64	58	44	54	144	35	52	52	503
弘化一慶応	30	16	13	39	55	18	16	27	214
明 治	47	50	36	51	95	44	106	60	489
年 代 未 詳						10			10
合 計	267	192	211	342	394	150	224	213	1,993
備 考	1. 語彙科は、単語、短句などを練習させる目的をつくった往来群である。 2. 消息科は、手続文を練習させる目的をつくった往来群である。								

注 石川 謙、寺子屋 214 頁より引用。

江戸時代末期になるにしたがって庶民の日常生活と生産活動の範囲も広がってきたので、この要請に応えるために新作の往来物が多種多数が刊行されたことは喜ぶべきことである。

歴史科の往来物は文化年間から刊行を増したが、他教科に比べて最下位であり全体の刊行総数に対してわずかに 0.07% であった。

歴史的の往来物が少ないのはつぎの理由によると思う。庶民が日常生活に役立つ手近かな知識は地誌的知識（第 1 位）と、手紙文の書き方であった。（第 2 位）、封建社会において厳重な身分の掟の中で生活するためには上下の礼儀作法の心得と道徳的判断の基礎を与える教訓が必要であった。（第 3 位）

歴史の書物は高度の漢学の教養が必要でありまた治者として上層階級の政治的教養として読まれたもので庶民にとっては無縁であった。

庶民の求める歴史的興味は、堅苦しい文字によるものではなくて大衆娯楽の言語や劇芸術によったのである。この題材は、国民的同情と轟負をうけている源平時代以後の各時代の中心人物が多かった。これが往来物となって多く使用されたのが源義経・曾我兄弟・熊

谷直実などであった。いずれも波瀾万丈で短い悲劇的一生を終った人物である。寺子屋の師匠には武士層が多かったので、一層この歴史的人物の往来物を教科書に用いたとも思われる。

漢字で書かれた歴史書は、藩校や私塾では使用されたが寺子屋の師匠の多くは、いわゆる手習い師匠であって漢籍の読書力のある人は少なかった。しかし江戸時代末期になると師匠も正規の教養を藩校とか私塾でうけた人が多くなり、加うるに寺子の教養も高くなってきたので、日本並びに中国の史書を用いて歴史教育を行なった寺子屋も多くはなってきたもののまだまだ少数であった。

2 歴史教科書の分析

寺子屋の教科書は多種多様であり一義的に分類でき難いのである。歴史的なものも同様であるが一応つぎの6類に分けてみた。

(1) 歴史地誌的なもの、(2) 歴史人物を中心としたもの、(3) 歴史の語彙を主としたもの、(4) 歴史千字文型のもの、(5) 法制的なもの、(6) 通史的なもの

(1) 歴史地誌的なもの 庶民生活に密接な地理的往来物が早くから多く刊行された。下表に示す地名集的なものと、名所・旧蹟の歴史散歩的なものに大別できる。

順位	教 材	使用者数	備 考
2	村名・村付・村尽	1,507	地名集的なもの
5	国名・国付・国尽	1,033	
12	郡名・郡付・郡尽	315	
22	東海道往来・都路	84	
25	町 名・町 尽	76	
34	江 戸 往 来	50	名所・旧蹟の案内記
35	都 往 来	50	
45	京 名 所	30	
57	東海道五十三次	20	
65	都 名 所	13	
66	大 和 廻	13	

注 乙竹岩造, 日本庶民教育史下巻 968~969 頁より集録。

上述の外に有名な社寺中心に「竜田詣」「鎌倉詣」がある。この種の往来物は広く各地域毎に作られていた。庶民の楽しみに旅行があり、この案内記の中で歴史的興味を場所によって満したのである。

(2) 歴史人物を中心としたもの 歴史上の人物の中で波瀾屈折に富み悲劇的な一生を終えた物語は、後世の人々の同情と共感を呼ぶものである。特に源平二氏の合戦に活躍した武将の行状は「源平盛衰記」や「平家物語」に書かれた。この流布は大衆芸術に属する「語り物」によって耳から心に訴え、所作で示す「歌舞伎」によって観客に共感を呼んだものである。この歴史的人物の物語は、今日われわれの想像以上に全国に普及し、日本人

の性情の陶冶に役立つたのである。

下表にあるごとく源義経を中心とする書状ものが4種もあって上位を占めている。義経の一生は数奇の運命の中に育ち、電光石火の歴戦の勇士となって登場し、兄頼朝に睨まれて平泉へ落ちわずか28才で自害した人生であった。武士の花としてこれほど国民に好まれる人はまれであり、「判官びいき」の語さえ生れたのである。

義経の外に武蔵坊弁慶、曾我兄弟、熊谷直実、平経盛の源平合戦に活躍した人物の勇ましくもあり哀れでもある物語の一部分を往来物にしたのである。時代が下って義経と並んで国民的英雄である豊臣秀吉中心ものが2種ある。この表にはないが「太平記」を底本として南朝の忠臣といわれた新田義貞・北畠親房・菊池武朝・楠木正成などの伝記を中心に、「太平記忠臣往来」「南朝太平忠臣往来」がある。太平記は物語僧や講釈師によって国民に知られていることを知れば、往来物に加わるのは当然であろう。

歴史上の人物の性格・行績を学ぶことによって、人間形成に無形の刺激を与えた効果は大きいものであり、今でも歴史的興味と関心をそそるのは史実そのものでなくて、人物史的な歴史物語か歴史小説の書物の方が大衆を引きつける力は大きいのである。

順位	教科書名(歴史的人物)	使用者数	順位	使用書名(歴史的人物)	使用者数
27	腰越状	97	65	太閤状	15
32	弁慶状	75	149	富士野往来(巻狩)	3
37	曾我状	49	163	太閤記	3
39	熊谷状	47	164	水戸黄門記	3
54	義経状	21	205	源平盛衰記	2
56	経盛返状	20	206	義経記	2
60	義経含状	18			

注 乙竹岩造, 日本庶民教育史下巻 958~986 頁より集録。

(3) 歴史の語彙を主としたもの

歴史の固有名辞そのものではないが多くの人名の書き方・読み方を挙げたものに4種類あり、源氏の名字だけを集めたものがあるのは、武門として源氏が数多くあり、その末流であることが武士としては名誉なことであることから、多くの寺子屋が用いたのであろう。また徳川家康が遠くは源氏一統の出身と伝えることでも想像できることである。

百官名は、官職名とか、年号とか天皇名を知することは広い意味の歴史的教養であり暗誦しておれば、歴史の理解の助けになり、歴史的興味を深めるもとにもなる。

(4) 歴史千字文型のもの

千字文は、四言古詩、二百五十句から成り、字数が千字あることから名づけられ、(梁、周興嗣撰) 古くから中国より日本に渡来し習字本として知識人に普及し、「千字書」として江戸時代習字の修業に使用された本である。(注、千字書は、一日に千字を書くことで、冬至または毎月二十日にこれを行なう習慣があった。)

この形式を借りて江戸時代に多種の国史の概説の千字本が発行された。総字数は千字で

順位	教 材	使用者数	備 考
3	名 頭	1,407	人名に関するもの
8	人 名	436	
51	名 尽	24	
52	百 官 名	24	官職の名称
58	源氏名寄	18	源氏一門の末流を示す
138	歴代帝号	5	歴代天皇の名号
156	歴代年号	4	歴代の年号名

注 乙竹岩造, 日本庶民教育史下巻 958~986 頁より集録。

あるが、一句は三字か四字に区切った詩形型のものが手習本として使用された。習字の手本が目的であるが、韻律を踏み暗誦し易いように書かれているので手習い中に歴史の概要を知るのに便利な本であった。寺子用には、日本外史や日本書紀のような歴史書より遙かに学び易い新型の歴史教科書である。

この形式の典型として本朝千字文、皇朝三字経、本朝三字経、大統歌を簡単に記すことにする。

イ 本朝千字文（享保十七年刊）、この本の作意は、「歴史提要。勸懲捷徑。誠乎童兒。勸哉習読」と末尾にあるので明らかである。一句が四字で全体が二百五十句で総計千字とし、儒学流の勸善懲惡思想で歴史事実を批判した一種の教訓書でもある。その一例を引用し解説を加えよう。

「義ハ害セラレ惡ハ斬ラル。池憐ミ妾愛セラル。傲ツテレ功ニ樂キレ岬ヲ。諫メテレ爺ヲ全ウスレ孝ヲ。牛若潜ニ去リ。僧都孤ヲ憫ム。」とあり、史実を四字に圧縮したので文面だけは迷句の連続である。

意味は、「源義朝は平治の乱に破れ、東国へ逃げる途中尾張で長田忠致によって殺された。源義平は、肉親を殺して悪源太といわれたが平治の乱で殺された。源頼朝は池の禅尼の憐みをうけて一命を保ち、常盤御前は平清盛の愛をうけた。平清盛は功を誇って大輪田泊を拡げ、平重盛は父を諫めて孝行を後世に伝えた。牛若丸は鞍馬山に潜伏し、僧俊寛は鬼界が島に流された。」というのである。かくのごとく故事の断片を書きつつも文字によって勸善懲惡の批判を行なったことは、朱子の通鑑綱目流の史書と史観の流れを汲むものであり、善惡の基準を与える読物としても寺子に与える影響は大きいといわねばならぬ。

この本朝千字文は、史詩型教科書の先駆をなし習字用よりも読書用の教科書として使用されたのである。

ロ 皇朝三字経（嘉永六年版）本朝千字文の流れを汲み三字六言を一句とし、韻をふみ暗誦しやすいように記述していることに特色がある。

つぎに書名に皇朝とあるように皇国史観で貫徹している。この書の序文には、「皇朝歴代国家治乱の概要を記し、児童がこれを暗記することによって皇国の故事を学ばせ、古人の善惡を觀察することを目的とし、徒らに古い伝説を知るだけに終ってはならぬ」とした。徳川家康を尊んで「御開国後太平二百余年であることは、東照権現様の神徳によること」

を説いて倒幕をし王政復古まで進むことを勧めていないのは注目すべきである。

三字・六言・一句の一例を示し解説を試みよう。

「神器三，鏡劍璽。智仁勇，三徳理。曰五常，曰十義。」とある。わが国の神霊は三種の神器の形によって鏡は知慧，劍は仁義，璽は勇気の意味を象徴しているという。これは作者の道德観であり政治理想を示したのである。この三種の神器の意味を，儒教の五常にあてはめて仁・義・礼・智・信の人間の守るべき道を意味するとし，これはまた十義すなわち父は慈，子は孝，兄は良，弟は弟（よく兄に仕えること），夫は義（正しいこと），婦は聴（専断せざること），長は恵，幼は順，君は仁，臣は忠なる十条の義理が人倫の地位によって定まっていることおも含むとしているという。

本朝千字文の四字一句の難句は，史実を断片的に並べたに過ぎないが，この三字経は，儒教による道德史観が皇国史観にかぶさっての歴史教育の思想色が強く出ている。

大局的には天皇の忠誠を述べつつも天皇の批判は何の遠慮もしていない。善政には「景行帝，在位時。征_レ新羅_一，神功_ノ績。武内臣，能謀_レ敵」とし，悪政には「雄略帝，大惡_ノ王。皇后諫_レ，停_レ暴強_一。武烈帝，割_レ孕胎_一。天下若，万民哀。」と書いた。

法制に一貫した研究を述べたのに，「昔聖徳，作_レ憲法_一。十七条，事非_レ狭。弘仁格，延喜式。此律令，後世，則。世繼_レ之，有_レ式自_一。（貞永式目）爾幼学，宜_レ反覆_一。」とあるのは出色である。

外戦は，神功皇后の三韓征伐，元寇，秀吉の朝鮮征伐で大勝を博し国威を海外に発揚したことを特筆している。

この流れをうけ寺子屋で用いられたものに国史千字文（角田錦江著明治6年刊），皇国千字文（河山貞山著）などがある。

皇朝三字経は，前述の本朝千字文に比べると儒教による道德史観と皇国思想とで史実を批判した色彩を強く出しているのが特色であり，庶民にゆるやかな尊皇思想を植えつけた教育効果は大きかったといわねばならぬ。

ハ 本朝三字経（大橋若水著 嘉永五年刊）著者は高名な史詩体の歴史家頼山陽の高弟であるから，南朝正統論を唱え楠公父子を礼讃している。「後醍醐，親執_レ政。雖_レ南遷_一，皇統正。正成賢，善_レ用_レ兵。尽_レ精忠_一，如_レ孔明_一。子正行，尋_レ北征_一。雖_レ不_レ成，同_レ天地_一。」とある。史論を挿んで尊王の大義を明らかにし，行間に尊皇思想の実践をほのめかしているのは，皇朝三字経と異るところである。この系列に続皇朝三字経，続日本三字文などが刊行された。

ニ 大統歌（塩谷宕陰著 嘉永四年刊）著者は水戸学派の学者であり，四字一句の詩型によって児童に暗誦し易くし日本国体論を鼓吹した書物である。対外的には神国優越を，対内的には皇統連綿による尊皇思想で貫いている。

この後続同型の書に，皇国小詩史，皇朝詩史，神代三字史，本朝沿革五字史などが上梓された。

（5） 法制的なもの 御成敗式目を教科書にしている寺子屋が 57 校あるのは異色である。北条泰時が中心となって制定した 51 条の法典は，武家法の基本となり，大体 15 世

紀末以降天下の大法の地位を占めていた。幕府や藩の掟が町・村の公札として公布されることが多くなったので、住民が読解するのに役立つために、この式目を教えたものと思う。とくにこの掟を冒すと個人のみならず一族や隣組に罪科を問われることを、予防するためにも必要であった。

(6) 通史的なもの 寺子屋で日本と中国の歴史書を教科書に採用していることは一覽表の示す通りである。この種の歴史書は、今まで文字的教養の高い文化人か治者階級の教科書で、高度な読書力を必要とする。このほとんどが昌平校や藩校の教科書として使用されていたのである。

この種の史書は手習用としてのいわゆる往来物型の歴史教科書ではない。相当な読書力のある師匠でなければ教えられるものでないし、また学ぶ寺子にしても相当な読書力を会得してからでないとこの学級には入れるものではない。寺子屋は別に学習年限がないから、勉強好みの本人と親の援助によって極めて少数の寺子が残留して読んだのである。

師匠は江戸時代中期から末期になるほど藩校や私塾の出身者が多くなってきた。そのために習字を専ら教え、時に若干の簡単な書物を教える程度のいわゆる手習い師匠では歴史の学術書を教科書として教えられるものではなかった。江戸時代中期以降になればなるほど民間の読書力は大いに増大したことは想像以上と思われる。その一例に辻講釈というのがあった。江戸では明和・安永の頃(18世紀後半)漢籍の辻講釈が行なわれて、講者は有志の聴講料にて生活の資をうることができたといわれている。これは江戸の特殊例であるが享保以前は儒者は祿仕しない限り学問を業とすることはできなかったが、宝暦以後(1751年以後)は学に志して必ずしも祿仕せずとも浪人学者として生活しえたのである。

この状況から推して、何時までも寺子が習字だけとか興味本位の千字文型で満足しないものが多かった現象は喜ぶべきことである。

日 本 史 の 部

順位	教科書名	使用順位	採用数	備 考
1	日本外史	20	126	頼 山陽著 情熱的名文
2	国 史 略	30	77	岩垣松苗著 初心者用
3	(御成敗式目)	35	57	鎌倉幕府(北条泰時ら)の制定
4	日本政記	74	12	頼 山陽著 政治論
5	皇 朝 史 略	88	9	青山延于著 大日本史の幼童用版
6	近 古 史 談	109	6	大槻磐溪著
7	日 本 書 紀	159	3	官撰の史書
8	大 日 本 史	212	2	徳川光圀撰 歴史教科書の原典
9	日 本 略 史	213	2	笠間益三編 平易な児童用

注 1. 乙竹岩造, 日本庶民教育史下巻 991~996 頁より抽出。

2. 3位の御成敗式目は通史ではないが便宜上挿入した。

解説 イ 高順位にある日本外史と日本政記は、共に頼山陽の著述である。

山陽は幼少時から「通鑑綱目」を読み朱子流の名分論を知り、修史の志は早くから立て

ていた。また彼が詩家であることは、「山陽詩鈔」や「日本楽府」の詩集でも著名であり大家の地位を占めていた。自らも「経書講釈等モ不得手ノ義、得手ト申而者史学文章ニ御座候」とあるのでも彼の志向が解るのである。

日本外史（22 卷文政十年刊）は、武家時代諸氏の興亡史であり、日本政記（16 卷文政十一年刊）は、神武天皇以来の通史である。両書とも、史書としての厳密さには欠けているが、流石は当代随一の名文家だけあって読者を惹きつける文章力は多大のものがあつた。

とくに日本外史は、詩人的直観によって史実の核心を貫き、史眼は朱子流により、論断は極めて鮮明である。料理した武人は国民的英雄として長い間敬慕し尊敬してきた平重盛、源義経、楠木正成であつただけに愛読者を増し魅了しうることができた。この日本外史の構成と表現は心憎いほどである。

日本政記は、極めて簡潔に国史の概要を示したので読者の魅力は外史に比べておとるのである。この両書の人心に訴える評判が如実に採用順位に現われていることは世評の正確さを示して余りあるものである。

寺子屋が多く採用したのは名文の魅力の外に、師匠と寺子の読書力の向上にあることを忘れてはならない。

好学心が向上したのは江戸時代泰平二百年の間、逐年上下・地方に普及したのは漢学尊重の文教政策による。庶民にまで漢文の読書力がおよんだのは幕末も終りになってからである。唯漢文を理解する読書力だけでなくこれを消化して文意を汲みとる力をもち、行間にある意味おも心に響かせる情操と理念をもつものが庶民層に多くなったのである。

明治維新の志士の誰もがこの山陽の二書を愛読し行動の指針としたことでもその評判は解るのである。二書は版行当時から幕末、明治初年にかけて尊皇思想を国民の心に植えつけ、王政復古の推進の役割を荷う伏線となった文章力の功績は大きい。直接倒幕を指向した史書ではない。これは山陽の対幕府観の遠慮勝ちな叙述に起因する。尊王を説いても倒幕攘夷までは述べていないが、行間に尊王の徹底は倒幕に向わざるを得ない筆法で書いている。単的には幕府の存在を消極的にも是認し論難はしていないからである。

幕府立の昌平校では、山陽の二書は教科書としては採用はしていない。山陽白眉の文章といわれるのは楠氏論に尽きるといわれている。楠氏が後醍醐天皇に尽した忠誠は、時代こそ違え尊王倒幕の礼讃であることでも不採用の理由は明らかであると思う。

この二書は藩校になると最多の採用教科書である。時代が下降するに従って幕運の衰退は明白になり、尊王倒幕の風潮は底流として全国に広まりつつあるとき、この二書が出版されたのである。

西南雄藩のごときは倒幕の気運が先覚の下層武士間に漲っていた時代であり、幕府の藩主に対する制圧力も微力になった時となつたので、藩校の藩儒は積極的に時流に遅れまいと尊王倒幕を志向さす危険書を使用したものと思う。

寺子屋は幕府とか藩主の制圧をうけるどころではなく、師匠の好みと寺子の欲求に応じてどの教科書を採用しようと意の儘であつた。

時局に明るくとも師匠に教える力のない者では、この二書を採用せず習字の外に往来物

風の易しい歴史向の教科書で満足していたのであろう。これが反映してこの著名な使用校は合計しても僅かに1%に満たないのである。

ロ つぎの順位は国史略と皇朝史略である。

国史略と（岩垣松苗撰 5巻文政9年刊）皇朝史略は（青山延于著 12巻文政9年刊）共に児童用向に書かれた漢文体の教科書である。両書とも日本外史のごとく強烈的な尊皇思想を鼓吹するのではないが、大日本史を底本とする初学者用の縮刷版であることは共通している。

この両書は、明治初年に文部省版「史略」（明治5年刊）と日本略史（明治7年刊）が全国に普及されるまで、庶民に寺子屋の外に広く読まれたのである。

外国史の部

順位	教科書名	使用順位	採用数	備 考
1	十八史略	21	126	曾先之撰 中国史の入門書
2	春秋左氏伝	31	75	左丘明著 儒教史観の中国史
3	史記	42	39	司馬遷著 中国正史一位
4	資治通鑑	96	8	司馬光著 名分論による中国史
5	通鑑綱目	96	8	朱子著 朱子学による中国史
6	漢書	130	4	班固・范曄著 中国正史二位
7	元明史略	214	2	後藤芝山著 元明の略史
8	万国史略	215	2	師範学校編 小学校用として平易

注 乙竹岩造, 日本庶民教育史下巻 991~996 頁より抽出。

外国史の教科書採用が日本史に比べて遜色のないことは驚くべきことである。外国史といっても中国史が中心である。

これらの史書は古くから日本に渡来し文化人なり治者階級の教養書として流布していたのである。昌平校と藩校では教師が儒者であり、生徒は治者であるので中国崇拜もあって、歴史の教科書としては日本史書よりも遙かに多く早くから使用されていた。幕末になると自国中心思想が盛んになり和学・国学が興り、歴史書も日本史書が多く採用されたがそれでも矢張り中国史書が多く使用された。

解説 イ 十八史略は、採用校の筆頭である。この史書は（曾先之撰 7巻）足利時代の末に日本に渡来したものといわれ、初学者用の中国史書として広まった。中国の龍大な史書である史記から宋史におよぶ十八史を底本にして簡約した中国略史である。中国では評判は悪いし日本でも識者はこのことを知りつつ使用した。江村北海は、「初学ノ徒ナラバマヅ十八史略ヲ読ムモヨシ。十八史略ハイヨイヨアラキモノナレドモ、編輯仕方ハ反テ綱鑑ニマサレリ」（日本文庫授業編巻之五）と認めている。

ロ 春秋左氏伝は第2位であり、十八史略に比べれば約半分である。左氏伝は（左丘明著、30巻、左伝ともいう。）孔子著の魯の国の歴史を述べた「春秋」の解説書である。孔子の道徳思想で書かれた史書であるからこの記述の精神を受けたものに、史記と資治通鑑

がある。

ハ 史記は第3位であるが十八史略の約三分の一の採用である。史記は（司馬遷著 136 卷）中国正史第一の史書といわれている。古くから三史（漢書・後漢書）の一つに数えられていた。

奈良時代の律令制下の大学の一科に紀伝道があった。読者はこの書によって中国の過去の政治の得失と事業の成敗の跡を知って自己の鑑戒としたのである。平安時代になると全国の官吏たらんとするものは五経の書とともに三史を読むことを要請しているその中の一書である。

ニ 資治通鑑と通鑑綱目は、ともに第4位であり、採用校は十八史略に比べると僅かに一割にもならぬ。資治通鑑は、（司馬光著 294 卷）左伝の後を述ぐ編年体の正史で君臣の義を主とする名分思想の史書である。通鑑綱目は、（朱子著 59 卷）資治通鑑を範としつつも名分論にあきたらず朱子流の厳格な史観で書いた史書である。両書は春秋流の儒教道德史観の双璧の書である。

上述の中寺子屋で使用された第一位の十八史略は、初学者向きであっただけに広く使用されたのであろう。左氏伝、史記、資治通鑑、通鑑綱目の四史書に至っては、龍大な巻数でもあり深い漢学読解の教養がなければ教えられるものではない。専門の儒者が教師である昌平校や藩校で広く使用するのは当然であるが、寺子屋の師匠ではこれを教える学力が何人あるか疑わしいのではないか。また受講生も昌平校や藩校では治者の教養として社会的地位につくために、在学年数も長く厳しく学習しなければ卒業できないのでよく学習したと思われるが、寺子屋では治者のための学習でなく極めて少数の学問好きの寺子が学んだに過ぎない。まして在学年数も寺子の自由であり、卒業しても何の社会的特権も得られないことを思えば、どれほど学び得たかその学力は疑わしいものである。

それにしてもこれほど多くの専門の高程度の龍大な中国史書を寺子屋で採用したことは、庶民の好学好史の表われといわねばならぬ。

3 歴史教科書使用の概観

人間が人生行路中に出会う哀歓は様々である。そのために過去の人物の行状に興味をもつのは自然の成り行きでもある。

江戸時代になれば歴史的興味があれば文盲であっても目でみる芸術、耳から聴く語り物の大衆芸術で吸収できたものである。

文字教養が行き渡れば歴史的読物の需要も盛んになってくる。寺子屋でも始めは歴史とは無縁の手習本を使っていたが、人名地名の語彙的なものとか名所旧蹟を記した往来物は、歴史的興味に無関係とはいえない。歴史的興味の場所にまつわる歴史散歩の手引の役割を果たしている。歴史的興味を直接に培う基礎的な知識として歴代年号や帝号、また名字や百官職名を手習本として使用している。

より以上に歴史的興味を誘うのは大衆芸術に取り入れられた歴史的人物の物語である。それ中でも波瀾万丈の悲劇の英雄の物語の哀歓を誘う一こまでである。

文字教育が深まるにつれて興味本位の歴史物の一こまでは満足できず、日本の歴史の中

で著名な人物の行状・事件の行方を知りたがるのである。これに応えたのが習字兼用の千字文型の通史である。この千字文型の歴史書を読書する中に善悪の判断を学ぶこともできた。これも幕末になれば勸懲思想の批判の上に、皇国意識を含んだ記述が多くなったのは時局の影響のためである。

昌平校や藩校で使った高度の日本と中国の史書を寺子屋で使用するほどに歴史的意欲が上昇してきたことは、例え使用校が少なく低度の学習をしたにせよ歴史教育の本流を示す教科書の選択といえる。

V 歴史教授の方法

読書用の教科書を教授する方法は、寺子屋では徹頭徹尾素読法によったものである。

昌平校や藩校でも読書力をつけるには素読を中心にした。この素読の外に文章や文字の意味を教えるのに講釈（別名、講義、講説、講談などという）の方法を加えたところが多かった。なお読書力を高め到会読（分団学習）を行なったり、独看（自主学習）の方法によったのである。

寺子屋では講釈・会読・独看を事実行なったかも知れないが資料では素読のみである。

読書段階に進む者は、寺子屋入りをして1～4年後に手習課程を終了した者が本人と父兄の希望により、寺子か師匠のいずれかで定めた書物を素読するのでその残留者は約2割に過ぎないのである。

わが国の読書教授は古から中国の董遇の唱えた「読書百遍、而義自見」のいわゆる素読で一貫している。寺子屋における素読は、師匠の音読にあわせて読唱するのであるが、その様式はつぎのごとく懇切丁寧である。

当番の寺子の呼出の順序により、5、6人ずつ書物と字突棒をもって師匠を中心に円形または方形に集まり、（机の前に静坐する）師匠が一句を読めば一同これに和して句読の齋読する。読めるようになった者は他と交代して退散するが、なお覚えのない者は個別指導を継続して行なった。とくに師匠が解釈を加えることもなく自学によって反復誦読を重視したのである。

別室で素読後、齋読や輪読を行なうこともあろう。寺子にとっては暗記力の訓練にこそなれ、意味も解らず毎日音読の繰り返しであったので退屈したことであろう。

進度は一回に一頁内外でこの学習の間は、私語は許されず正座をしたままであった。

元来寺子屋の師匠は手習に強く読書に弱いといわれているが、嘉永・安政のころには読書教授をする寺子屋が多くなってきたといわれている。

読書方法を示した儒者に、貝原益軒（1630～1714）の和俗童子訓（貝原益軒全集第巻3所収）と江村北海（1713～1788）の授業篇（日本文庫巻之四所収）が有名である。この両著に従って素読の進め方で句読、音読、復習、会読を説明しよう。

イ 句読 句読はまず句の切れ目を重んずる「句ハ一章ノ中ノ大ギレ、読ハ一章ノ中ノ小ギレナリ。」（江村北海）と。句読を寺子にうませず教える工夫をあげて「小児に初て書

を授くるには、文句を長くおしゆべからず。一句二句をしゆ。又一度に多く授くべからず。多ければおぼえがたく、おぼえても堅固ならず。其上厭^い倦んで学をきらふ。必たいくつせざるやうに少づつ授くべし。小児の文学のおしえは、事しげくすべからず。事しげく、文句おほくしてむつかしければ、学問をくるしみて、うとんじきらふ心出来る事あり。故に簡要をゑらび、事すくなく教ゆべし。すこしづつをしゑ、よみならふ事をきらはずして、すきこのむやうにおしゆべし。むづかしく、辛勞にして、其氣を屈せしむべからず。」と説いている。(貝原益軒)

ロ 音読 音読教授の心得をあげて「書を読むには、必句読を明にし、よみごをゑを詳にし、清濁を分ち、訓点にあやまりなく、てにはを精しくすべし。」(貝原益軒)という。また正確に音読するには速度にまで注意をして、「凡書をよむには、いそがはしくはやくよむべからず。詳^{くわしくゆるやか}に読^よみて、字字句々分明なるべし。一字をも誤るべからず」と。(貝原益軒)読書のときは精神を集中して学ばせなければ教育効果はあげ難いとし、「必心到、眼到、口到るべし。此三列の中、心到を先とす。心不^レ在^レ此、見れどもみへず。心到らずして、みだりに口によめどもおぼえず。」(貝原益軒)と説く。

音読と黙読の長短については、「コレハ各得失アリテ、一方ニ定テハイヒ難シ。声ヲ揚テヨムナラバ、字音ヲ正シ、句読ヲ分チヨムベシ。」といい黙読では誤読を訂正することができないのである。

ハ 復習 一度読誦してもすぐ忘れるので返り読みを勧めている。「かへりよみすくなければ、必わすれて、わがならひし功も、師の教へし功もすたりて、ひろく数十巻の書をよんでも益なし。一卷にてもよくおぼゆれば、学力となりて功用をなす」と。(貝原益軒)

ニ 会読 読書の方法に各種ある中で、友人数人で無用の閑話・雑談を避けて会合し読み合わせることをいう。会読には予め自ら下調べを行なつて不審の箇所を尋ねなければ時間の浪費になる。徒らに会読しても上述の準備をしなければ効果が上らぬことを戒めて、「今時ノ書生輩ノ会読ト云ハ、自己ニ書ヲ読ムコトヲセズシテ、会読ヲ以テ読書トスルハ、余イマダ其説ヲシラズ」と(江村北海)いう。

素読した部分を、復習や会読によって暗誦するまで記憶させることに努めたが、寺子の苦難は相当であった。唯退屈を少なくして早く読ませるために奪^{とり}読^{よみ}(誤読したらすぐその跡を読むとか、誤読を発見させる)とか対読(同じ文章を同時に読み互に誤りを指摘する)を試みたが、とにかく読書回数を多くして記憶に訴えることは何百年も継承した読書法であった。

益軒は「少年の時は、記性つよくして、中年以後数日におぼゆる事を、只一日半日にもおぼえて、身ををはるまでわすれず、一生の宝となる。」といい素読を礼讃している。素読の徹底化すなわち文章の記憶化を図るために句読、音読、復習、会読の諸方法を述べたが、読書教授法の王者は素読であった。服部南郭が(1683~1759)素読排斥論を唱えたが寺子展ではとりあげられなかった。

素読は、「令」の学制以来の「読」で文意を解しないで百遍の読書を繰返す、そして記憶によって暗誦を強いたことは古今一貫している。もちろん読書力がつけば一通り文意を聞

かせる方法をとったであろうが、寺子にとっては苦業の読書法で迷惑なことであった。

VI 歴史試験の方法

昌平校や寺子屋では、試験のことを吟味といったが、寺子屋では「^{さらい}浚」といった。

浚は「さらふ」と読み、未熟をさらに繰返して学習することで、復習とか温習と同義語である。

寺子屋によって区々であるが、大体「大浚」と「小浚」の二種が行なわれた。大浚は1年に2回とか1回行なった例が多い。小浚は毎月一回行なったのである。手習いの方は「書き浚」といい、読書の方は「読み浚」といった。歴史向きの教科書は、読み浚の対象になる。

試験はいつの世でも苦痛なもので「大浚・小浚手本取られて泣浚」のこの当時の川柳でも明らかである。

昌平校や藩校では、読書力を試す素読吟味は和解と称し、毎月一回は行なわれた。その方法は教科書の一文を白文で出題し、句読点・返り点・送り仮名をつけさせたり、日本文に書き下ろしをさせた。

採点の基準も明らかで米沢藩興讓館の実例を示すとつぎのごとくである。(安永2年の例)

史記 全、二ツ許 14 才正、同一ツ許 15 才弱

注 教科書は史記を用い、その中の一文を白文で出題し、完全に読めたものは、全、14 才までは2つの誤りを 15 才の者は1つの誤りを正とし、全、正ともに合格とした。この数以上の誤りをするとは不合格である。

寺子屋には、大浚、小浚の素読の試験の問題も評価の基準も管見の資料では見当たらないのが遺憾である。推測によれば教科書の一節を読ませて師匠が合否をいい渡したのではないかと思う。

以上